虚偽検出検査における返答に及ぼす質問の影響

○石岡綾香・小野洋平・軽部幸浩・谷口泰富

(駒澤大学文学部)

キーワード: 虚偽検出, 質問, 返答

Effects of Questioning and Responding Styles in Detection of Deception

Ayaka Ishioka, Yohei Ono, Yukihiro Karube and Yasutomu Taniguchi

(Faculty of Letters, Komazawa Univ.)

Key Words: detection of deception, question, response

目 的

虚偽検出検査において検出効率を上げるには、種々の方法が考えられるが、質問法や返答法を検討することも重要である。すでに石岡他 (2011) は、仮想犯罪場面に関する調査研究から質問が返答に及ぼす影響について検討を行なっている。本研究では虚偽検出における質問が被検査者に及ぼす負荷の程度、そして有罪事態・無罪事態における返答の特徴に関する意識調査を行なった。

方 法

【調査対象】 大学生 452 名 (有罪条件: 男性=112 名, 女性=107 名, 無罪条件: 男性=126 名, 女性=107 名, 平均年齢=18.7 歳) を対象に無記名で実施した。

【状況設定】 調査は架空のストーリーをもとに、窃盗行為の有無に関する質問およびそれに対する返答に対してどのような意識を持っているかを回答させるものであった。なお、有罪条件は、日常生活でつい窃盗してしまい、その後に問い合わせを受けた場面を設定した。一方、無罪条件では窃盗していないにも関わらず窃盗に関する問い合わせを受けた場面を設定した。

【質問紙】 質問に関する調査内容として、肯定形式質問「…を盗ったのですか (以下質問 A)」および否定形式質問「…は盗らなかったのですか (以下質問 B)」に加えて、質問語尾を変化させた「…を盗ったのですね (以下質問 C)」および「…は盗らなかったのですね (以下質問 D)」の計 4 種類の質問を採用し、これらに対して自分が疑われないようにするためには、どのように質問されると答えにくいかを順位づけさせた。

【返答方法】 返答は、単純返答「いいえ」あるいは「はい」、文章返答「いいえ、盗っていません」あるいは「はい、盗っていません」を採用し、いずれの返答方法が答えやすいかを質問ごとに選択させた。なお、本研究では質問内容 (500 円玉・500 円 QUO カード・10,000 円札・10,000 円 QUO カード) を操作し、虚偽検出検査における刺激価の影響についても検討した。

結 果

図 1 は、調査対象者が各質問に対して回答を求められた場合の抵抗度 (答えにくさ) について、質問ごとに順位の平均値を示したものである。

図 1 両条件下における各質問に対する抵抗度

分析の結果、質問法の違いにより抵抗度には差が認められた (有罪条件および無罪条件ともに全ての質問の間で $p<.01$)。なお、両条件ともに刺激価の違いによる抵抗度の差はいずれの質問においても認められなかった。

次に、最も答えやすいと選択された返答方法 (単純返答・文章返答) について分析を行なった。図 2 は質問形式の違いから、図 3 は質問の語尾の違いから、期待度数に対する実際の度数の割合を示したものである。

図 2 質問形式ごとの返答方法の割合

図 3 質問語尾ごとの返答方法の割合

分析の結果、いずれの質問においても、刺激価に相応したような返答方法の違いは認められなかった。しかしながら、図 2 に示されたように、肯定形式の質問がされた場合、有罪条件では単純返答、無罪条件では文章返答が多く選択される傾向が認められた ($\chi^2(1)=9.91, p<.01$)。また、図 3 に示されるように、語尾が「…か」となる文形で質問がされた場合、有罪条件では単純返答、無罪条件では文章返答が多く選択される傾向が認められた ($\chi^2(1)=6.28, p<.05$)。さらに、質問ごとの分析では、質問 A の文形で質問された場合、有罪条件においては文章返答よりも単純返答が多く選択され、無罪条件においては単純返答よりも文章返答が多く選択されるということも明らかになった ($\chi^2(1)=7.46, p<.01$)。

考 察

本研究の結果、質問に対する返答の側面から刺激価の影響を認めることはできなかった。しかしながら、質問形式や質問語尾を変化させることにより、質問に対する抵抗度や選択される返答方法が異なることが明らかになった。この結果は虚偽検出検査における質問法が被検査者に対して何らかの心的影響を及ぼすのみならず、生理心理学的虚偽検出場面における検出効率の変動にも影響を及ぼす可能性を示唆するものである。